

～ 楽を分かりやすく解説イヤホンガイドの活用法とは ～

## イヤホンガイドで楽しむ

### 「文楽鑑賞教室」

2007年6月10日(日)午後1時～5時

文楽を楽しむイヤホンガイドについて

講師: (株)イヤホンガイド 佳山泉さん

会場: 国立文楽劇場

久々の文楽鑑賞教室、熟塾では大夫・三味線・人形遣い・床山・衣裳・小道具について話を聞いたので、次のテーマを探しあぐねていた時に、イヤホンガイドについてはまだ裏話は聞いたことがないのに気がついた。

文楽はわかりにくいと頭から倦厭している人には特にオススメだし、何度か観ていてもイヤホンガイドの解説があると更に楽しめるので、私はいつも借りるようにしている。今回はイヤホンガイドで文楽を楽しもうというテーマで、株式会社イヤホンガイドでオペレーターや解説も担当している佳山泉さんから誕生の秘話から解説者の心構えなど、裏話たっぷり聞くことができた。(原田彰子)

### 文楽を楽しむイヤホンガイドについて

(株)イヤホンガイド 佳山泉さん

#### まずは(株)イヤホンガイドの会社紹介ビデオ放映

ビデオ概要: 1976年歌舞伎の楽しみ方を紹介するために朝日解説事業株式会社として創業。歌舞伎の同時解説から始まり、需要に応じて国内外の多くの劇場で活躍。2005年に社名を株式会社イヤホンガイドと変更。イヤホンガイドは、舞台の進行に沿って受信機によって

お客様に解説を届け、歌舞伎・文楽など古典芸能等をより理解いただく案内役を担っている。制作過程は、解説委員が舞台の内容を簡潔に伝え舞台の邪魔にならず観客の目線で舞台を楽しんでいただける原稿を用意し、舞台の進行に合わせて録音。オペレーターは、当日の舞台の進行に合わせて録音した内容を流す。現在、イヤホンガイドの利用者は年間二百万人を数え利用者が増加。

1995年には舞台側面に歌詞や説明を緑色で浮かび上がらせ、明るい場所でもくっきり見えるコンピューター制御による高性能字幕システム「新電光字幕」G・マークも開発・導入し、イヤホンガイドの解説に加えるようになった。製作者と相談し、脚本から字幕原稿を作り、舞台に照射する位置やタイミングなどを打ち合わせる。G・マークはオペラ・ミュージカルなど様々な分野から注目されている。

#### イヤホンガイド誕生秘話

どうしてイヤホンガイドが出来たのか。これは、創業者の久門郁夫が、新聞記者から放送局に出向していた時、電波法に触れない弱い電波を使ったラジオ局の活用法はないかと考え、高速道路や競馬や競艇・サッカー・プロレス・ゴルフ・相撲関係に当たったが、いずれも事業化できずに

ボツ。そんな時、フランスに出張した飛行機の機内でフランス映画が放映されていたが、当時は字幕もないので内容がわからなかった。ところが同行した同僚がフランス映画通で、「あいつは悪い奴で」と機内で映画のストーリーなど解説してくれたので、初めて見たフランス映画がよく分かり楽しむことができた。断片的な“情報”だけで話が繋がったので、ちょっとした解説をつければ演劇はわかり楽しめるようになると思いついた。観てわかりづらい演劇で思いついたのが、歌舞伎だと、帰国後早速訪ねたのが古典芸能の普及を図る国立劇場の理事長さんにアタック。しかし「歌舞伎は日本人なら何度も見ているうちにだんだんわかってくるもの」と断られ、それでも「今の人が、見慣れない古典芝居をなんども観てくれるでしょうか・・・」と反論するも返事なし。

後がないので『商業劇場の歌舞伎座は、啓蒙的なイヤホン解説なんかに興味ないだろう』と決めていた歌舞伎座に飛び込み堀内森夫支配人に説明すると、これまで続かなかった外人用の英語イヤホンはダメだが、日本人向けで、日本語で解説するなら OK と快諾。ラジオ構想から苦節 8年、堀内支配人も劇場に若いお客様の姿が少なくなっているのを危惧していたので、対応は早く。二ヶ月後の昭和49年11月の顔見世の歌舞伎座で実験的なイヤホン解説に漕ぎ着け、一年間テストし、翌年11月から本放送となった。国立劇場でのイヤホンガイド放送も始まり、様々な劇場での利用者も増え2005年には(株)イヤホンガイドに社名を変更する中、昨年11月に伝統芸能・舞台芸術に対しての長年の功績に対し社長の久門郁夫が文化庁長官賞を受賞。イヤホンガイドの存在がやっと世間に認められるようになった本社は東京の銀座にあり、大阪は文楽劇場のすぐ近くある。

#### 解説・オペレーションの裏話

当初は歌舞伎の入門としてイヤホンガイドを始めたが、聞き慣れればお客様はイヤホンから卒業されるだろうと考えていたが、意外にリピーターが多いのは、演目は同じでも解説者によって切り口が異なり、学校の授業の文献重視や分析ではない「観客の目線で話し、芝居と一緒に楽しむ」解説が好評。

私自身は、(株)イヤホンガイドの社員で、お客様にイヤホンの貸し出しをしたり、録音したテープを場面に合わせて放送するというオペレーターの仕事をしたり、解説も担当させていただいている。イヤホンガイドは、劇場内で微量の電波を受信機に流しイヤホンで聞くシステム。

幕間の休憩時間でも楽しめるように、歌舞伎なら歌舞伎俳優のインタビューを、文楽でしたら竹本住大夫さんのインタビューを放送。生放送ではなく、基本的には録音した解説者の内容をオペレーターが当日の舞台の進行を確認しながら放送している。普通の商業演劇は何度も舞台リハーサルがあり、歌舞伎の舞台稽古でもそこをもう一度やろうかということはあるが、文楽は大夫・三味線・人形の舞台稽古は伝統芸能の舞台稽古は一度きりのため、よく観て原稿を仕上げた別の場所で録音したものを、当日オペレーターが放送。小山観翁さんクラスのベテランになってくると原稿は持たず、一度きりの舞台稽古を観ながら同時録音しその間でぴったりと舞台の進行にあうので凄いなあと感心。小山観翁さんの解説は、一度きりの舞台稽古にあわせての収録になるので、撮り損ねないようにと緊張が大きい。舞台初日舞台は、進行と解説がぴったり合うタイミングで流せるかのオペレーター作業はとても緊張。台本には切欠が書いてあるが、ライブというくらい舞台は生き物なので息が違ったり、歌舞伎とかは、主役が花道から出てくる設

定になっていたのに、幕が開いたら舞台上にいる等演出が違っていたりするので、録音した解説にある「花道から出てきた」という部分はカットして流すなど臨機応変に対処しなくてはならない。特に舞踊の流すタイミングは難しく、京鹿の子娘道場寺という有名な歌舞伎の女形の舞踊では、恋の手習いの場面で手ぬぐいを出してくる場面があって、手ぬぐいにはその役者の紋が染められているが、広げて紋が見えるタイミングで紹介のコメントが流さなくてはならない。またオペレート作業をする場所が文楽劇場のように後方の映写室のように舞台の進行を確認しやすい場所であればいいのだが、様々な劇場に行くので、例えば南座のように舞台向かって後方の下手のライトを当てている後ろでテープを放送するというオペレート作業をしている為、照明のライトとライトの間から舞台進行を覗きこんでの作業となり結構神経を使う。

文楽の場合は、日本語と英語を一人のオペレーターが同時に流しているの、片方の耳で日本語を聞いて、もう片方で英語を聞いて同時に流している。台本に書いている英語と日本語の切欠が異なるので、両耳の神経と手元に注力して対応している。また休憩時間の変更があった場合は、解説者によっては 30 分あればしゃべり続けられる方と、10 分くらいなら二度幕間に流す。前の幕の時間が伸びたときは、休憩時間が調整され 20 分になった場合などは 30 分のうちどこでできればお客様に支障がないかを考えて判断し文章の山場を考慮して短くするときもある。

役者の台詞と台詞の間に解説を入れるので、出すタイミングが大切で、芝居との解説の一体感を持っていただけるように解説者とも相談しながら、イヤホンガイドを使用されているお客様がより舞台を楽しんでいただけるようにしゃべり、またしゃべりすぎずのタイミングや解説内容を検討するなど、たいへんだが、とてもやりがいのある仕事だと思っている。文楽では 5 時間近く一人でオペレートしているが、毎日芝居を見ることができ、芝居好きにはたまらない仕事かもしれない。

私自身はオペレーターの仕事以外に、解説の仕事も担当させてもらっているの、どんな演目でも解説できるように、舞台上で表現されること以外にも、江戸時代の歴史や文化・世相など日々勉強するように心掛けている。お客様が欲しい情報をどう時間内に納めて解説するか。痒い所に手が届く解説を心掛けているが、対象が、初心者から長年鑑賞されてきた方もいらっしゃるの、不特定多数の老若男女にわかっただけの言葉を使って解説するのが難しい。一つのことを紹介するにも、日本語には沢山の意味があるので、その場面を解説するのに適した言葉は何だろう。何と云えばいいか。時間的な制限の中で 10 くらい知っていても 1 くらいしか出せないの、ここでこの話がしたいけどという葛藤が始終ある。江戸時代という時代背景の違いもあるし、初演当初に流行っていた世相も織り込まれていたりするのでその説明が必要。「生写朝顔話」という演目に朝顔が何故入っているのかという、江戸時代に造園ブームがあり朝顔に人気があったので、すれ違ひのはなかい恋を映す花として演目に盛り込まれている。江戸時代、文楽は大衆の娯楽であり興行だったので、お客さんが入るか演目で、お客さんの呼び込みを図ることが大切だった。

文楽は大阪弁なので、大阪弁の解説でもいいのだが、解説が聞き取りにくいとかお客様が舞台上に集中できないので、聞きなれた標準語で解説するようにしている。「着物を着る」と、「袖を通す」とでは舞台の印象が異なるので、その場にあった言葉を使うように心がけている。また世話物は市中町人の話だが、時代物は武士の話が中心なので、舞台の雰囲気に合わせて語り口を変えている。武士のお話だ

と、低い声で重厚なしゃべりぐちで言葉も選び、世話物はやや早口で軽い語り口で解説するようにしている。主役はお芝居なので、お芝居の雰囲気壊さないようにしゃべり、しゃべりすぎないように気をつけている。主人公を取り巻く脇役の心情や役柄を紹介して舞台全体に観客の目が行くようにし、掛詞など字幕に表示されている内容も紹介しながら字幕も舞台の一部という感じで解説。今の上演法式は、よりどりみどりのみどり狂言といわれ、長いお話のいいところだけを観たいという関西的な趣向。上演される場面までの物語を前解説といって、解説者の個性が光るところ。筋だけではなく演目に関しての私感とか、切り口も換わるので途中からのお話しにすぐ入れるので前解説からお聞きいただくとより舞台を楽しめるだろう。

歌舞伎は役者さんの台詞と台詞の間に解説を入れるが、浄瑠璃はすべて聞き所なので解説を入れるのが難しい。どのように舞台解説しているかを知っていただくために演者さんにも解説テープを渡し、意見を頂き、決してお芝居の邪魔をするような解説はしていませんよと分かってもらえばかりか、舞台のこの部分をこのように解説しているのでイヤホンガイドを聞いていらっしゃるお客様は注目されていますよということをお話していただいている。

イヤホンガイドは独占産業ともいえるが、字幕システムは他社も行っていきます。文楽のイヤホンガイド解説は 1980 年・昭和 55 年 12 月に東京の国立劇場から、大阪は 1996 年・平成 8 年から文楽劇場でも放送開始。世話物は大阪弁なので大阪人には聞きやすいためか大阪の利用率は低いですが、東京の歌舞伎座は五割の方にご利用いただける。

一般の美術館でもイヤホンガイドと称されるほど普及したが、会社として「イヤホンガイド」として昨年商標登録した。



参加者は、集合写真を撮った後イヤホンの機会を手に劇場内に走りこんだ。

舞台では、三河から太夫と才三が新春の喜びと新しく建てた家の繁栄を祝って賑やかに唄い舞う**寿柱立万歳**に続き、三味線・人形遣い・大夫の若手からそれぞれの役割についての紹介を聞き、**仮名手本忠臣蔵**のうち**二つ玉の段・身売りの段・勘平切腹の段**を鑑賞。夫・早野勘平の仇討ち資金の為に遊女に出る覚悟を決めたおかるの前金を一文字屋から受け取り懐に夜道を急ぐおかるの父が盗賊に大金を巻き上げられ殺されて谷に突き落とされる。ちょうど猪の猟をしていた勘平は物音に猪と間違っ盗賊を射殺し、懐から大金を見つけ夜の闇の中を走り去る。朝になってもおかるは父親が帰ってこないの心配していたが、一文字屋の亭主がおかるを迎えにやってくる。夜道を帰るといので、親父さんは自分の着物と同じ生地で作った財布に前金を入れて帰らせたという。勘平は懐の財布の生地に気がついて、間違っ殺したのは舅だったのかと思ひ込み、おかるには親父さんには今朝会ったと嘘をつ

いて十文字屋に出発させる。しばらくすると獵師中間が父親の遺体を見つけて家に運んでくる。母親は勘平が懐に持っている血染めの財布を見つけて騒ぎ出したところに、ちょうど訪ねてきた浪士の原郷右衛門と千崎弥五郎に、娘を売ってこしらえた金を婿は待ち伏せして撃ち殺して大金を盗んだと訴えるので、勘平は切腹し罪を償おうとする。二人が父親の遺体を確認すると刺し傷だったので、道中見た鉄砲で撃たれた山賊が父親を殺したのだと疑いが晴れ、討ち入りの連判状に勘平の名も書き加え血判させ、勘平の最後は大星蔵之助殿に伝えるといい、年老いた母親には百両を舅の婿の供養の為に渡し涙ながらに立ち去る。

**参加者：一般：井上純世・菊地まどか・中島圓・宮谷知子・宮谷正美 塾生：秋山建人・井上章・大利忠・北村千代江・杉山英三・中島一・原田彰子・宮本麗子・森欣子**

### ～イヤホン余話より東西 文楽見聞録 佳山泉～

2003年、文楽はユネスコから「世界無形遺産」に確定されました。私は平常大阪文楽のイヤホンオペレーターですが、先月は東京国立文楽小劇場でオペのお手伝いでした。東京と大阪のお客様の“文楽”の受取り方をチョット・・・。

#### 大阪は本場ですが、

人形浄瑠璃・文楽といえば、大阪が本場。今は、文楽の由縁の旧跡が多い日本橋にある国立文楽劇場がホームグラウンドです。大阪での公演は、年間五ヶ月（1、4、6、7～8月、11月）。客席は七百余り。各公演期間は三週間と、なかなかの公演数なのですが、上演される演目や公演時間によってお客様によってお客様の要りにバラつきがあるのがちょっと？・・・。

一方、東京は国立劇場・小劇場での公演で、会場が小さいだけに席数は六百弱ほどと少なく、公演期間は毎回二週間です。しかも一年の公演は、二月から十二月までの間に四回。大阪より少なく、さらに前述のように公演期間が短く、会場の席数も少ない。けれど近頃、東京の文楽人気は半端じゃなく、なんと、ほとんどの公演で「前売チケット完売」日が続出。当日券を求めて早起きして行くと、もうそこには長蛇の列が・・・という具合です。となると、収容力からみて入場券はプラチナチケットと化します。「プラチナ」なんていわれると、これまた欲しくなるのが人情。こうしてますます、文楽人気は高まり、嬉しい悲鳴となるのですが、この人気を「大阪にも分けてほしい」というのが私の本音です。

#### なぜ東京人は文楽を・・・

歌舞伎は、中村獅童人気から、若いお客様が多いそうです

が、文楽の若い方のお目当ては人間国宝の方たちだっているんですから、わからない。“渋い”至芸をこの目で実際に観たい。そして観るとハマった・・・というパターンのようなのです。

しかしこのハマるといのが、文楽の不思議な魅力。私も初めて文楽を観たときは、意味はよく分からないながらも「これええわ～」と思ったのです。「じゃあ、何が良かったのか」といわれると、語りの詞を理解できたわけでもなく、ストーリーに共感したというわけでもない。最初に観たのは『寺子屋』でしたが、共感どころか、むしろ、若い私には理解に苦しむ内容。なのに、どうして「いいか」となったのか？やっぱりそれは人間の心なるものを、実感できたからではないでしょうか。かつこいいことを言うようですが、つまりは柵やらに悩み、苦しむ昔の人の感情が、大阪弁のアクセントの義太夫節と三人遣いの人形によって、一気に身近なものになったのです。

#### せっかく来たんやから・・・

東京の文楽人気は人口に比例して観客も多い、というだけでなく、やはり“お土地柄”でしょうか・・・。大阪のお客様は「せっかく来たんやから楽しませてや～」の心境。これは文楽を“娯楽”と受け止めているからですが、東京では“教養”と考えられているようです。「世界遺産の文楽、まだ観てないの？」と、誘われて観にきたら、ハマっちゃったというわけで・・・。大阪のお客様は見慣れた“通”のお客様が多いんです。そうすると、イヤホンの出番は少ない？と心配されそうですが、文楽をよく観ているというお客様ほど、いざイヤホンを使ってみると、「面白い！」という方がほとんど。“通”のリピーターが目白押しなんです。

#### 声がかかる大阪

客席の雰囲気は東西どう違うか？大阪は、なんてったって掛け声がかかります・上手の床（大夫と三味線が語る所）が廻って、お目当てが出てくると、「待ってました！」とか「〇〇大夫！」なんて声がいい。歌舞伎の大向こうさながらですが、東京では、この掛け声はめったに聞けません。恥ずかしがり屋さんが多いのか。邪魔してはいえない思われるのか。お行儀よく観劇・・・というスタイル。どうやら大阪は、文楽を「聴きに」、東京は「観に」行くという感覚の違いからきているよう。要するに、西は大夫、三味線の“床”を中心に、東京は“人形”を中心に観る人が多いのでしょうか。大阪では、幕見席がありますから、一演目だけでも、また、もう一度観たい演目も気楽に観られます。もちろん幕見イヤホンもあります。

～ 第二回大阪ヌーボフェアに先立ち大阪ヌーボの故郷・柏原・羽曳野を訪ねましょう (^^♪)～

## 大阪ヌーボを楽しむ為の大阪ワイナリー探訪バスツアー

日時：2007年9月1日(土) 《先着申込 25名様》  
行程：JR大阪駅(9時)→ JR天王寺(9時半)→ JR柏原(10時)→  
★カタンモワイン：葡萄畑見学・国の登録文化財のワイン貯蔵庫見学 →  
★ひめひこワイン：葡萄畑見学と高尾山からの眺望を楽しみながらバベキューでの昼食 →  
★仲村わいん工房：メルロー等の葡萄の試食 → ★飛鳥ワイン：葡萄畑見学 →  
★河内ワイン：河内ワイン館の見学 → JR天王寺→ 難波 → JR大阪駅  
会費：一般 8,000円・塾生 7,500円 《バス代・バーベキューの昼食・ワイン付》



ボジョレーヌーボ解禁日にあわせ、今年も11月15日(木)夜に淀屋橋の大阪倶楽部でなにわ伝統野菜の天王寺鶏・油辺大根・勝間南瓜と楽しむ第二回大阪ヌーボフェアを開催します。今年のヌーボ(新酒)を楽しむ前に、各ワイナリーを訪ね、葡萄畑を巡るバスツアーを急遽企画しました。ワインも購入可能！雨天決行！畑にも入りますので、しっかりした服装でお越し下さい。(乗車場所は JR 大阪駅・天王寺駅・柏原駅からお選び下さい。)